



写真1 学会参加登録会場にて。

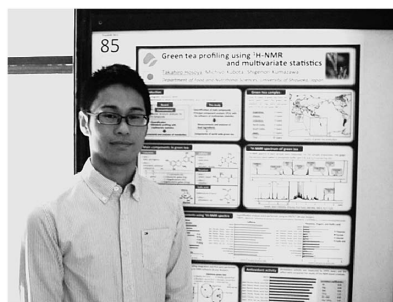


写真3 ポスター発表。



写真2 学会会場（劇場）の様子。

起こってしまいが、これら重なり合ったシグナルを分けることができる技術があることを知った。重なり合ったシグナルを分けることができれば、より確実に詳細な定量分析

や解析ができるようになり、確実性や新たな解析に応用することができる。また、「緑茶以外に紅茶では試していないのか？」との質問も受けた。紅茶についてのFoodomics研究は、現在当研究室が進めていることであり、次回の学会にて報告したいと思う。

今回、FoodMR2014に参加することで、非常に有意義な経験を行うことができた。様々な研究者の講演を拝聴し、ポスターセッションでのディスカッションを通して、我々が現在進めている研究の方向性を確認することができ、今後の研究へのモチベーションをさらに高めることができた。最後になりましたが、FoodMR2014に参加するにあたり、ご援助頂きました公益財団法人農芸化学研究奨励会に厚く御礼申し上げます。

## アメリカ微生物学会第114回年会（ASM 2014）に参加して

富山県立大学工学部生物工学科 高橋裕里香

2014年5月17日から20日にかけて、米国マサチューセッツ州ボストンのBoston Convention & Exhibition Center (BCEC) で開催されたアメリカ微生物学会第114回年会（114<sup>th</sup> General Meeting, American Society for Microbiology）で発表する機会を与えて頂きました。ボストンはアメリカで最も歴史の古い街の一つで、ハーバード大やMITなどの大学があることでも知られています。現在も経済・文化の中心として機能し続けており、街並みも歴史的な建物と近代的な建物が良く調和していました。

今回の会議の主催団体であるアメリカ微生物学会（ASM）は、1899年に微生物関連の学会としては世界で初めて設立された、現会員数は3万9千人を超える非常に大きな団体です。そのような巨大な学会ですから、微生物学に関わる全ての分野—すなわち微生物（細菌だけでなくウイルスも含む）の分類、進化、細胞、生理、代謝、遺伝、生態…などの基礎研究、ヒトや家畜の感染症や公衆衛生などの医

療分野、環境問題と微生物の関連、微生物の産業利用などの応用—をカバーしています。年会（General Meeting）はこれらすべての領域の研究者が参加するので、会場の規模は非常に大きく、口頭発表は27の領域ごとに同時進行で行われ、ポスター発表数は3000件以上（一日あたり1000枚が掲示されて次の日にはまた新しいものに貼り換え、というシステム）、企業ブース会場だけで東京ビックサイトの1ホールが埋まりそう、という状態でした。

企業ブースで次世代シーケンサー関連技術の興隆が目立つのは日本国内の学会と同様の傾向でしたが、細菌を病原菌として捉える医学的研究の発表が多いのは国内学会やこれまで参加した欧州の国際学会ではあまり見られない点だと思いました。どちらかと言えば細菌を人間の役に立つ生物と捉えて上手に利用・共生しようとする日本的な（農芸化学的な）考え方との文化の違い、医学系研究に予算が付きやすいアメリカの政策、比較的小規模の学会に細分化されている日本の微生物学の状況、が垣間見えた気がしました。これまでに何度も参加したことのある先生方から「ASM Meetingは“お祭り”だから、本当に自分の分野に関連した情報を集めるにはもっと規模の小さい学会に



写真1 ポスター会場の様子.



写真3 企業ブースの様子.

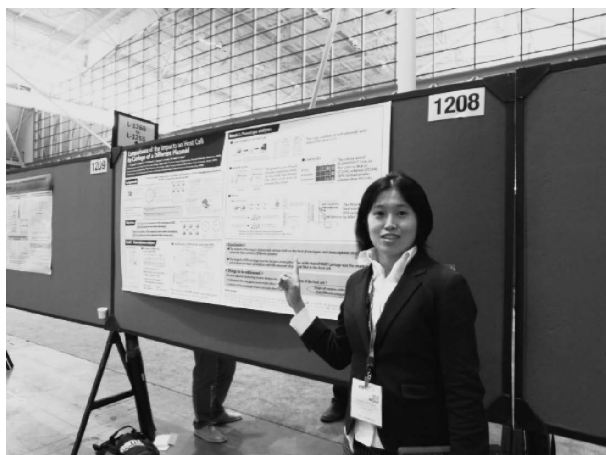


写真2 著者とポスター.



写真4 ボストンの街並み.

行ったほうがいいけど、アメリカの微生物学全体のトレンドやこれからどんな方向に進もうとしているのかがよく分かるよ。」という言葉をよく聞いていたのですが、今回参加してみてその意味を実感しました。

私は「Comparisons of the Impacts on Host Cell by Carriage of a Different Plasmid」という演題でポスター発表を行いました。参加登録後の2014年4月に現所属先に赴任したので、前所属での研究内容です。可動性遺伝因子の

一種であるプラスミド DNA が宿主細菌にどのような影響を与えるのかを、3種の異なるプラスミドを同一の宿主にそれぞれ保持させた株を表現型・トランスクリプトームの面から比較解析した結果でした。プラスミドというと多剤耐性菌を連想させるのか、比較的立ち寄ってくれる方が多く1時間半の発表時間の大部分をポスター説明・discussion に充てることができ有意義でした。

最後になりましたが、本学会への参加にあたりご支援いただきました、公益財団法人農芸化学研究奨励会に厚く御礼申し上げます。